OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	A群色素性乾皮症の歩行障害に関する臨床生理学的, 動作学的検討
Author(s)	井藤, 尚之
Citation	大阪大学, 1988, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/36652
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【81】

氏名・(本籍)	井藤尚之
学位の種類	医学博士
学位記番号	第8384号
学位授与の日付	昭和63年12月1日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**A群色素性乾皮症の歩行障害に関する臨床生理学的，動作学的検討**
論文審査委員	(主査) 教授 藪内 百治 (副査) 教授 最上平太郎　教授 津本 忠治

論文内容の要旨

〔目　的〕

A群色素性乾皮症（Xreoderma Pigmentosum）（以下ＸＰ）の神経症状による歩行障害を，臨床生理学的，及び，動作学的，また，簡便，かつ，非侵襲的に評価・検討し，同時に，本症の歩行障害に対する，中枢性筋弛緩剤である塩酸エペリゾン製剤の効果を検討する。

〔方法ならびに成績〕

①11例のA群ＸＰ患者において，自然歩行時の，大腿四頭筋・ハムストリング・前脛骨筋・腓腹筋における表面筋電図所見，踵と，つま先に装着したフットスイッチから得られたバゾグラム，および，前胸部の左右方向への動揺のパワースペクトラムから，歩行パターンの分析を試み，年齢，および，病期による変化について検討した。その結果，A群ＸＰでは，脊髄小脳のレベルを中心とする，上位中枢性障害による歩行障害が5歳以降出現し，10歳以降に顕著化することが，示唆された。

②うち3例（失調性歩行を示すもの2例，痙性歩行を示すもの1例）のA群ＸＰ患者に対し，塩酸エペリゾン製剤（3㎎／kg／day）投与前と，投与開始3カ月後に，歩行障害の臨床的評価と，歩行パターン分析を行った。臨床的評価では，年長で，より障害の強い2例（失調性歩行を示すもの1例，痙性歩行を示すもの1例）で，下肢の動きに改善が認められ，下肢表面筋電図所見においても，同じ2例で，持続性筋放電，立脚期群化放電，及び，相反性支配障害の改善を認めた。また，歩行の安定性の指標として，遊脚期・立脚期比の変動係数を求めたところ，3例すべてで，治療後には改善が認められ，塩酸エペリゾン製剤は，A群ＸＰの歩行障害に対して効果があることが示唆された。

〔総　括〕

本検討に用いた歩行パターン分析法は，簡便で，かつ，非侵襲的でもあり，ＸＰ患者の進行度や，薬物治療・リハビリテーション・装具・関節固定術などの適応の決定・効果判定の手段のひとつとして重要であり，また，非常に有用であると考えられた。また，塩酸エペリゾン製剤はＡ群ＸＰ患児の歩行障害に対して有効であり，その作用機序・有効性を考える時，本症の歩行障害出現時期と，正常人の歩行の発達段階との関連性を考慮する必要があると考えられた。

論文の審査結果の要旨

Ａ群色素性乾皮症では５～６歳以降神経障害のために歩行障害が出現する。本症患者の歩行障害を臨床生理学的，動作学的に検討するため，自然歩行時の大腿四頭筋，ハムストリング，前脛骨筋，腓腹筋における表面筋電図，バゾグラムを検し，歩行パターン分析を行なった。

その結果，歩行障害が脊髄小脳のレベルを含めた上位中枢性障害により生じ，それに対して，塩酸エペリゾン製剤が有効であることを認め，本分析法が，神経障害進行度の判定，薬剤の効果判定に有用に用いられることを示した点で，本論文は価値あるものと思われる。